

パナマ研修員受け入れ実習について

野村 哲也
(農学部附属農場)

はじめに

パナマは北アメリカ大陸と南アメリカ大陸との中央に位置し赤道近くにあるため、一年中高温多湿の亜熱帯気候で、年平均気温は26、4℃である。国土面積は77,000k m²あり、人口は270万人、パナマ運河があることで有名である。

1999年にアメリカから運河の返還が実施され、大きな転換期を迎え、2000年には、貧富および地域間格差の是正、経済の持続的成長、環境保全、運河および周辺流域に支援が必要であることを確認し JICA (国際協力事業団) のプロジェクトが立ち上げられた。この国では、運河の水源を確保することにつながる森林などの環境保全が大きなテーマであり、「パナマ運河流域保全計画」(技術協力プロジェクト) が開始された。今回、研修員として受け入れる事になったのは、このプロジェクトの果樹繁殖法コースに属する Luis Alber to VegaRuiz 氏で平成14年10月31日～11月22日まで指宿植物試験場にて実習を行なった。

実習内容

この研修では、果樹(マンゴー)の繁殖法の習得が目的であるため、接木を中心に挿し木、取り木等の繁殖方法を指導した。各繁殖方法の原理については、遠城先生に講義を行なってもらい、実習中は JICA 監理員の篠原健志氏に通訳を行なってもらった(パナマの言語はスペイン語)。

パナマと日本の大きな違いは、まず道具の充実度である。剪定バサミはあるようだが、接木用ナイフは無くカッターナイフのような物で接木を行なっているようだ。そのためナイフの取り扱い方が難しいらしく、片手で台木に切り込みを入れたり、穂木の切り方にしてもおぼつかなく、道具の正しい使い方からの指導となった。台木の切り込みについては、何度言っても聞き入れてもらえなかったもので、台木を持つ手にタオルを巻いて作業をしてもらうことにした。ナイフを使用した後に砥石で研いでもらったが、パナマには荒砥石しかなく、仕上砥石の取り扱いも最初の方だけ戸惑っていたが、最後には上手に研ぐことが出来ていた。接木は主に合わせ接ぎ、切り接ぎ、割り接ぎを行い、地植えのものには皮接ぎを行なった。接木の成績としては60%くらいの出来で、思った以上に成功率は高かった。

現地での作業は立ちながら接木を行なうとのことだが、今回の実習ではコンテナの上に座り、時間をかけて作業をしてもらった。

挿し木に関しては、現地でも行なった事があるようで、指導するには至らなかった。

取り木は、グアバとマンゴーで行い、成功率の低いマンゴーでも発根がみられ成功していた。思った以上に器用に作業をこなし、研修終了時にはある程度の技術は習得していた。

視察研修

視察では、近隣の熱帯果樹、観葉植物農家、屋久島のかんきつ農家を訪ねた。

山川にある熱帯果樹農家では、マンゴーの鉢植え栽培に興味を持っているようであった。また、パナマでは施設内でのマンゴー栽培は殆ど無く、強風により苗が倒伏し、失敗する事が多いようで接木苗の管理が困

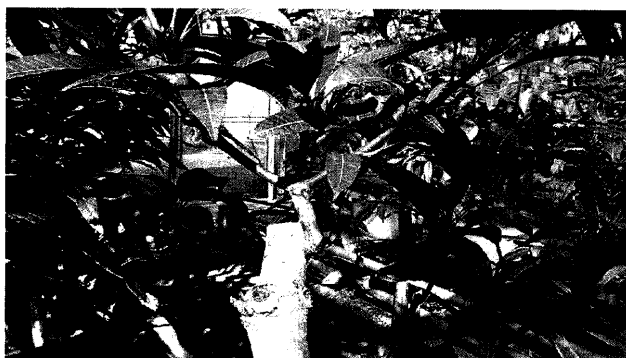
難だということである。園芸資材も乏しいため、竹を利用してトンネルを作り、防風対策を行ないたいと話していた。

屋久島のかんきつ農家ではポンカンの収穫時期が近く、果実を狙ったサルの被害が続出しており、その対策として電気柵が張り巡らせてあった。サルの行動や習性についても詳しく聞いているようであった。また、世界遺産として登録された屋久島の雄大さにも心を打たれているようであった。

おわりに

今回初めて外国からの研修生を受け入れて感じた事は、言葉の違いがあるにせよ、取り組む姿勢は真摯で様々な事に興味を持ち、理解し、上達も早く感じられた。現地では指導員として農家に技術指導を行なうとのことなので、今回の実習を生かしてもらいたいと思う。また、このプロジェクトは5年間継続で、あと2年あるので機会があれば率先して参加したい。

パナマ研修員の実習に参加でき、このような機会を与えていただいた方々に心からお礼を申し上げたい。



皮接ぎ法



合わせ接ぎ法



実習風景 1



実習風景 2